県内初！全国和牛能力共進会　特別区への道

５年に一度の“和牛のオリンピック”と称される第 12 回全国和牛能力共進会（以下全共）において、今大会から高校や農業大学校が競う「特別区」が新設されました。近畿・北陸の代表として、滋賀県立長浜農業高校が出場されました。その経緯について当校の廣田先生にお話をお聞きしましたので、ご紹介させていただきます。

当校における肉牛の飼養は、2000 年４月に 46 頭の黒毛和種および交雑種の肥育牛を導入したのが始まりで、専ら肥育牛を飼育されていました。その後 2004 年に滋賀県畜産技術振興センターから繁殖牛を１頭導入し、一貫生産を開始されました。日常の飼育は、生徒も一緒に世話をされています。

全共の特別区を目指したきっかけは、前回の 2017 年宮城大会において滋賀県代表で「家畜審査の部」に出場された時に、デモンストレーションとして設けられていた「復興の部（高校生が育てた牛を出品する部）」があることに気づき、５年後の鹿児島大会では、正式な部門として新設されることを知り、目指されました。

出場に当たり、滋賀県として種牛の出品は初めてで、分からないことばかりの上、県内に教えてくれる方がおらず、手探り状態で県予選を迎えられたのですが、日頃、生徒さんたちが毎日牛と接しておられたので、何とか乗り切ることができたそうです。その後、岐阜県の方に講師として来てもらい、本番まで毎日調教や手入れを行ってこられました。特に牛の調教には苦労されたそうです。その他、給餌は牛の状態をみて行うなど、基本的なことを教えてもらいました。

大会では、生徒さんたちは初出場であるにもかかわらず堂々と臨んでくれ、感動的だった、他校との交流を通して技術の継承をしたことなどが印象に残っているそうです。

結果は、特別区では優秀賞 16 席、家畜審査の部では優秀賞を受賞されました。結果が伴って安心しているとともに、次への意欲につながりそう、とのことで、

「出場したことにより、周りの農家さんや関係企業の方に目をかけていただけるようになりました。生徒たちはこれらの期待に応えようと意識が高まり、日々の作業をより一生懸命に取り組むようになりました。今後とも関係企業、県職員の方々と連携して５年後の北海道全共に向けて取り組んでいきたい。今度は、血統名や日々の管理レベルの向上に着眼し、今回より良い成績を残したい。」と意欲満々です。

今回、大会に関わった生徒さんたちは、小動物看護師の資格を取得したい、農業大学校へ進学して畜産の技術を学び、将来畜産の担い手になりたいと思ってくださっています。未来の滋賀の畜産を担ってくださる生徒さんたちが頼もしい限りです。（小森）

大会後長浜農業高校へ帰着